

福井県医師会

だより

第591号 平成22年(2010)9月



花火 福井市 吉村 信

表紙写真説明：花火

福井市 吉村 信

花火を撮るのは難しい。近付き過ぎると全体像を捉えられず、遠ざかり過ぎると線香花火の様で迫力不足となる。背景が暗黒なのでシャッタースピードが遅いとブレ易い。窮余の策として、望遠レンズで距離を調整し、シャッターを超高速で落としたものをコンピューター処理したところ、御覧の様な幻想的な花火となった。

真夏の夜の一瞬の花火は、走馬灯の様に遠い昔の記憶を鮮明に呼び覚ましてくれる。

亡き祖母と手を握りて見し花火かな

## 醫 縫 録

# 医療の目指すところ

福井県済生会病院長 田中延善



ようやく、ロンドンからの機内にてこの原稿を書き始めたところです。五日間の滞在でしたが、かつて住んでいたロンドンの住宅地区は28年前と変わっておらず昔にタイムスリップした気分でした。当時は研究が主で、医療についてあまり考えたことがなかったような気がします。福井に赴任してからは内科(肝臓病)診療を無我夢中で行ってきました。院長になって1年足らずですが、遅まきながら医師になって37年が過ぎたところで医療の目指すところを考えるようになり、臨床医としての原点を振り返るための旅行でもあったと思います。

現在も英国の医療は無料です。サッチャー時代の医療費削減による医療崩壊の傷は大きく、その後の大幅な医療費増額にもかかわらず医療状況は混迷を続けているようです。多くの優秀な医師が海外へ流出したことも要因の一つのようです。訪れたKing's Collegeは30年前から肝臓移植のメッカですが、多くの肝胆道系疾患も手術しています。CT検査を頻回に行う余裕がなく、3カ月前のCT検査で手術を行った際、既に多臓器からの肝転移を認めることもあるとのことでした。一度崩壊した医療を回復させて高いレベルに達するには労力と長い時間があることを痛感しました。日本でも医療費削減政策、医師不足、医療事故、医療訴訟など、医療を取り巻く環境が厳しい状況にありますが、改めて医療の目指すところについて考える良い機会でした。弱者である患者の救済であるべき医療が、経済政策に振り回されるのは仕方ないことでしょうか。バブル時期、老人医療費無料など税金の無駄とも思える政策をとる一方、バブル崩壊後はWHOから高い評価を受けていた国民皆保険も危機に瀕して自己負担額も3割に達するなど、さらに、医療費亡国論や医師の数だけ医療費が上がるとした医師過剰論がまかり通っていました。その結果、医療崩壊が叫ばれるようになり、ようやく医師の増員や医療費削減の見直しが行われています。

好んで病院(クリニック)へ行く人はいません。

痛みを伴う怪我や病気、辛い検査や治療など、患者さんは仕方なく病院(クリニック)を受診しています。患者さんの大半が肉体的不安、精神的不安、経済的不安などを抱えています。そして、病気が治ることを期待しています。病院(クリニック)は、患者さんの抱えている不安や期待に応えなければなりません。即ち、医療の目指すところは患者さんのニーズに応えることであり、質の高い医療を提供することであると考えます。医療を行うためには、人力とハード・ソフト、そして、ホスピタリティが必要ですが、さらに医療の質を確保する重要なことはチーム医療です。チーム医療は医療を協力の科学として行うべきであり、医師を始めとする全ての医療従事者が、患者さんのために結束し、各々が目の前の問題を解決するために補助し合い、そして、各々が仲間の支援をあてにすることができるようであればなりません。チーム医療の重要性はウイリアム・J・メイヨーが100年前から提唱しています。チーム医療に必要なチームワークは、コミュニケーションから生まれます。コミュニケーションはフラットな組織から生まれます。私達はフラットな組織作りを行わなければなりません。

地域医療連携も重要なチーム医療です。地域医療を担っている医療機関は、急性期病院、亜急性期病院、療養型施設、在宅ケア、かかりつけ医など様々な機能を分担しています。患者さんの病態に応じた医療を提供することが患者さんのニーズに応えることです。地域での様々な機能がつながったシームレス・ケアの医療であり、value chain(バリューチェーン)といえます。地域でのチーム医療を担っていくことで地域完結型医療が推進されていくと考えます。混迷している医療状況の中、医療の目指す方向を見失わないことが医療人に求められていると思います。